





国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は十九ページまでである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合し確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入しなさい。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は楷書で正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. この試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

日本美術の特徴として早くから指摘されていたのは、(左右)相称性(symmetry)の不在、または非相称性(asymmetry)の強調である。それがもつとも鮮やかにあらわれているのは、建築と庭園においてであろう。

絵画は描く。自然があたえるその対象の多くは左右相称ではない。それを縮小し、稀には拡大し、抽象化して二次元の空間に投影し、おそらく環境の理解や記憶を助けるために、描く。絵画の歴史をどこまでさかのぼっても、旧石器時代の岩窟の壁面に到ってさえも、画面に左右相称的な構図を見出すことは困難なようである。

建築は描かない。それ自身の外部にあるいかなる対象も記述しないし、環境のいかなる要素も反映しない。窓は外部を反映するのではなく、外部に反応する装置である。建築や庭園は、祈るため、儀式や魔術を行うため、商売を営むため、家族が寝起きするため、それぞれ特定の目的のために、建築家が特定の空間を彼自身の考えと好みに従って構造化する空間である。建物は厳密に左右相称的なことも、全く非相称的なこともある。その間に相称性のあらゆる段階があり、それが建築家とその文化に条件づけられていることはいうまでもない。

a 一方に古代ギリシャの神殿からパツラーディオ(一五二〇—一五八〇年)に到る相称性があり、他方に桂離宮¹や茶室の徹底した非相称性がある。庭園についても同じ。ルノートル(一六三—一七〇〇年)は広大な地域に造園のあらゆる要素、植込みや花壇、水や芝生、大理石の彫刻や手すりなどを、左右相称の幾何学的図型として整然と配置する。およそ同時代に桂離宮の造園家は、小さくかこまれた空間に日本全国の名所の風景を縮小して再現した。その庭の中の小径を辿れば、展望は X する。そこに相称性はなく、幾何学的配置はない。非相称性を中心とする空間の分節化・構造化は、建築と庭園においてもつとも典型的にあらわれる。

² 建築的造形の相称性を、大きくみれば、中国・西洋・日本の文化はそのまま三つの類型を代表すると言えるだろう。中国は徹底した相称性文化の国であり、日本文化は正反対の非相称性に徹底する。西洋はその中間に位置する。すなわち西洋の伝統では、ほとんどすべての記念碑的建物が正面の左右相称性を強調する。それは宗教的建物(教会や墓所)の場合でも、世俗的建造物

(王宮や市庁舎の場合でも変らない。しかし私的な個人住宅に相称構造を見ることは、例外的な有力者の大邸宅を除いて、きわめて稀である(たとえば南フランスの中世都市カルカソン)。しかるに中国では記念碑的建築はもちろん、私的住宅にさえも左右相称の原理が徹底することがある。前者の例は、北京の紫禁城であり、敷地内の建物の配置、建物それ自身の構造、内装の細部に到るまで相称性が浸透して余す所がない。その高い城壁の内側へ入れば、直ちに相称性によって秩序づけられた空間の中に包みこまれる。そこには明朝の皇帝の権力と豪華さとともに空間の合理的秩序があつて、はるかにルイ王朝のヴェルサイユ宮の幾何学的空間と呼応している。中国の伝統的な個人住宅の左右相称性は、その典型的な例を北京の四合院に見ることができる。道路に面して、左右の壁の中央に入口の開口部がある。建物は四方から中庭——その中央にしばしば樹木や井戸がある——をかこみ、各部屋は中庭に向つて開いている。四合院は北部(北京、天津)で発達したが、その影響は遠く甘肅省にまで及んだという。

中国文化における相称性の強調は、建築様式にかぎらない。いわゆる殷周銅器に早くもその特徴はあらわれているし六朝以後の陶磁器においてはさらに徹底する。また周知のように唐代以後の「近体詩」の詩法は、対句の規則を制度化した。対句は概念の相称的配置である。対句に似た修辭法は、日本やヨーロッパの詩文にもないことはないが、中国の場合にくらべれば、それはほとんど例外にすぎない。中国では対句こそが詩法の中にあり(殊に「律」)、散文においてさえも広く用いられたことがある(六朝以来の駢體)。相称性の好みは、都市計画、建築の外観と内装、家具や器から、定型詩の概念的構築にまで、一貫するのである。そういうことが一〇〇〇年以上も続けば、規則や習慣は内面化され、日常生活の中にまで浸透することになるだろう。相称性嗜好はなぜ起こつたか。それはわからない。その背景には環境を理解する道具としての陰陽説があるのかもしれない。陰陽に正負を割りあてゼロ点を図面の中央に置けば、容易に左右相称が得られる。しかしここではその問題に立ち入らない。

西洋はながい間中国を知らなかった。日本は中国文化の強い影響を受けながら、左右相称志向を受け入れなかった。もちろん中国モデルで京都を作つたときには、モデルの左右相称性が京都にも移された。「洛中洛外」などという表現にもそのことはあらわれている。大陸のモデルに従わない日本の町が碁盤目状の道路を持つ例は、

b

一つもない(大坂、江戸)。法隆寺を例外として、大きな仏教寺院の伽藍配置も同じ大陸モデルに従っている。一例を挙げれば、四天王寺(六世紀末から七世紀にか

て聖徳太子が造営したとされる)では、真中の軸線上に中門・塔・金堂・講堂をならべ、中門と講堂をつなぐ回廊が塔と金堂をかこい込む。日本の伽藍配置にもいくつかの型があるが、いずれも左右相称であるのは、大陸の寺院の例を模倣したからである。神社の建築は、仏教寺院のその影響を受けて成り立った。しかし、それは寺院の忠実な模倣ではなく、一種の「日本化」である。そこでは境内の建物の配置に、仏教寺院の場合のような厳密な左右相称性はない。「日本化」は常に相称性を排除する方向へ進むのである。

中国文化の強い相称性志向の背景に陰陽の二分法があつたとすれば、それとは対極的な日本文化の非相称性強調の背景には何があつたか。街道に沿つて発展した町、農家から武家屋敷までの建築の平面図、桂離宮の建物と庭、茶室とその周辺の美学、———そのどこにも相称性を含まない空間の秩序は、どういう文化的特徴を条件として成り立ったのか。

日本語の定型詩が対句を用いるのはきわめて稀である。詩論、すなわち平安時代以後、殊にその末期に俊成・定家父子を中心として行われた「歌論」が対句に触れることもない。その理由は比較的簡単で、要するに日本では『古今集』以来極端に短い詩型(いわゆる「和歌」)が圧倒的に普及したからである。音節の数では和歌(三二)は五言絶句(二〇)よりも多いが、語数では和歌の方が少なく、対句を容れることはほとんど物理的に不可能である。しかも後には連歌から「俳句」が独立して和歌(または短歌)に加わる。俳句はおそらく世界中でも最短の詩型の一つであろう。俳句はそれ自身が一句だから、対句は問題にならない。『万葉集』の時代には「長歌」もあつたし、『梁塵秘抄』の時代には「今様」もあつた。

そのどちらにも二行を一組として扱う対句の多用はみられない。『万葉集』の長歌の技法には、相称的な形容句を重ねて用いる修辭法が含まれるが、その場合にも相称的表現が作品全体の構造に決定的な役割を果たしたわけではない。今様は四行の歌詞である。その二行が中国風の対句を作る例は、現存する本文に関するかぎり、ほとんどない。要するに極端な短詩型の支配は、左右相称の言語的表現を排除したと思われる。

しかしそのことは造形的表現における相称性への抵抗を説明しない。抵抗の背景は、あたえられた空間の分節化・構造化の過程が、全体の分割ではなく、部分からはじめて全体に到る積み重ねの強い習慣であるのかもしれない。別の言葉でいえば、「建増し」主義。建増しは必要に応じて部屋に部屋をつないでゆく。その結果建物の全体がどういう形をとるかはその第一義的な

関心ではない。先にも触れたように一七世紀前半の武家屋敷では、途方もなく複雑な形をとる。あれほど複雑な平面図があらかじめ計画されていたとは考えられないだろう。建増しの結果は複雑なだけでなく、優美で調和的な全体でもあり得る。たとえば桂離宮。しかし左右相称は全体から出発することを求める。二等辺三角形は三つの頂点の位置関係の全体によって決まるので、その三点に石を置くか、三人の人物を配するかは、各点(部分)の性質とは係わらない(全体から部分へ)。部分から全体への建増し主義が左右相称に偶然行き着くことはあり得ないだろう。それは処理すべき空間の大小に係わらない。把手は襖の部分、襖や棚は書院の部分、書院は建物の、建物は庭園の部分である。部分と全体の関係は遍在し、部分が全体に優先する——細部は全体から独立してそれ自身の形態と機能を主張する。それが非相称的美学の背景にある世界観であろう。その世界観を時間の軸に沿ってみれば「今」の強調であり、空間の面からみれば「ここ」、すなわち眼前の、私が今居る場所への集中である。時間および空間の全体を意識し、構造化しようとする立場に立てば、相称的美学が成り立つ。相称性は全体の形態の一つだからである。

山国の「自然」にも間接の役割があるかもしれない。この国にはアジア大陸の広大な沙漠や草原がない。人は谷間や海岸の狭い平地に住み、大きな町は四方または三方を山脈にかこまれた盆地に発達する。風景はどの方向を眺めるかによって異なり、日常生活の空間があらゆる方向に均質に広がってはいない。京都の東山と西山の山容はちがう。北山と南に開ける平野とは地形が異なる。深い杉の林の斜面と大小の河川が海に注ぐデルタ地帯。ここに「自然」の相称性は全くない。自然的環境は左右相称性よりは非相称性的美学の発達を促すだろう。

社会的環境の典型は、水田稲作のムラである。労働集約的な農業はムラ人の密接な協力が必要とし、協力は、共通の地方神信仰やムラ人相互の関係を束縛する習慣とその制度化を前提とする。この前提、またはムラ人の行動様式の枠組は、容易に揺らがない。それを揺さぶる個人または少数集団がムラの内部からあらわれれば、ムラの多数派は強制的説得で対応し、それでも意見の統一が得られなければ、「村八分」で対応する。いずれにしても結果は意見と行動の全会一致であり、ムラ全体の安定である。

これをムラの成員個人の例からみれば、大枠は動かない所与である。^{*}個人の注意は部分の改善に集中する他はないだろう。誰もが自家の畑を耕す。その自己中心主義は、ムラ人相互の取り引きでは、等価交換の原則によって統御される。ムラの外部の人

間に対しては、その場の力関係以外に規則がなく、自己中心主義は露骨にあらわれる。このような社会的空間の、全体よりもその細部に向う関心がない間に内面化すれば、習いは性となり、細部尊重主義は文化のあらゆる領域において展開されるだろう。空間の構造化は、全体を分割して部分に到るのではなく、部分を積み重ねて全体を現出させる。建増し過程のそれぞれの段階にそれぞれの全体像がある。建物の全体が部分を意味づけるのではなく、全体に係わらずに細部はそれ自身で完結した意味をもつのである。そこから非相称的空間の美学までの距離は遠くない。ヴェルサイユの庭にとって決定的なのは、全体の整然たる見透しであり、その建物にとって重要なのは、中央部と左右両翼の均衡である。桂離宮の廻遊式庭園において決定的なのは各部分の風景の多様性であり、建物の魅力は部屋ごとに異なる内装の細部と窓の眺めである。この対照的な相違の背景は、思考と感受性の型のちがいであり、⁴そのちがいは遠く自然のおよび社会的環境のちがいに、少なくともある程度まで由来するのである。しかしそれだけではない。

非相称性の美学が洗練の頂点に達するのは、茶室の内外の空間においてである。その時期はおよそ一五・一六世紀の内乱の時代(戦国時代)と重なっていた。なぜだろうか。内乱は多くの町を物理的に破壊した(殊に一五世紀中葉の応仁の乱は長い間文化の中心であった京都を焼きはらった)ばかりでなく、社会秩序を破壊し、権力を分散させた。九州から東北地方に及ぶ各地域に武士団が割拠し、対抗し、その全体を統御する経済的・軍事的力は、

d

京都の公家にも武士権力(幕府)にもなかった。

ムラ社会全体の極度の安定が人の注意を細部に向けたとすれば、武家社会の全国的な流動性(「下剋上」と内乱)、その全体の秩序の極度の不安定も、社会的環境の全体からの脱出願望を誘うだろう。ムラの安定性が用意した心理的傾向(mentality)は、全国的内乱の不安定性によって強化される。それは必ずしも因果関係ではないが、武士の頭領たちが権謀術数の世界から逃れて茶室の静かな空間へ向う傾向を援けたにちがいない。その空間は自然と歴史に抗して左右均衡の構造を主張するのではなく、自然の中で時間の移りゆきに従いながら細部を限りなく洗練する。大きな自然の小さな部分としての庭、その中へ吸いこまれるように軽く目立たない茶亭、その内部の明かり取りの窓、窓の格子に射す陽ざしが作る虹、粗壁の表面の質と色彩、茶道具殊に茶陶、その釉葉（ゆうく）がつくる「景色」の変化……。そこには相称的な構造を容れる余地が全くない。そこにあるのは非相称的空間であり、そ

の意識化としての反相称的美学である。意識化 (prise de conscience) は一五世紀の村田珠光にはじまり、一六世紀の千利休に到って徹底し、e 「侘びの茶」の体系として完成する。これは一種の美学革命である(その思想的背景は禅)。その後の日本美術への影響は、広汎で深い。

(加藤周一『日本文化における時間と空間』より)

(注)

所与……他から与えられること

釉薬……うわぐすり

問1 空欄 a k e に入る最も適切な語を次の中からそれぞれ一つ選んで、番号をマークせよ。ただし、同じものを繰り返し用いてはいけない。

- ① おそらく ② もはや ③ すなわち ④ しかし ⑤ いわゆる

問2 空欄 X に入る最も適切なものを一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 千古不易 ② 十重二十重 ③ 千篇一律 ④ 百花繚乱 ⑤ 千変万化

問3 本文には、次の一文がある段落の末尾から脱落している。どこに入るのが最も適切か。入るべき箇所の直前の五字を記せ。(句読点も字数を含む)

【脱落文】 時空間の「今ここ」主義を前提とすれば、それ自身として完結した部分の洗練へ向うだろう。

問4 傍線1「桂離宮や茶室の徹底した非相称性がある」とあるが、筆者はなぜ茶室がそうしたものになったと考えているか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 桂離宮の廻遊式庭園の魅力は各部分の風景の多様性にあり、また建物の魅力は部屋ごとに異なる内装の細部と窓の眺めにある。そのような桂離宮の中に茶室があり、それが結果的に非相称的な茶室になったと考えている。
- ② 茶室は大きな自然の小さな部分としての庭、その中へ吸い込まれるように軽く目立たない茶亭、その内部の明かり取りの窓などで構成される。そのような形が優れていて美的であるためには非相称性が必要だと考えている。
- ③ 内乱の時代には多くの町が物理的に破壊され、なおかつあらゆる全体的に均衡したものを滅ぼし尽したために、その後の安定期には専ら部分を志向する考えとなり、非相称性の美学の茶室になったと考えている。
- ④ 戦国時代を背景に、社会秩序は破壊され権力は分散された。武士の頭領たちが静かな茶室を求めた時には、大きな自然を取り込む小さな庭などの細部に関心がゆき、自ずと非相称性の茶室空間になったと考えている。
- ⑤ 茶室の美学は一五世紀の村田珠光にはじまり、一六世紀の千利休に至って徹底し、「侘びの茶」として大成していく。そのような中で禅の思想が持つ左右非相称性と融合して左右非相称の茶室になっていったと考えている。

問5 傍線2「建築的造形の相称性」とあるが、筆者は日本のな建築や庭園などの造形的な表現が非相称的である理由を一言で記している。その最も適切な七字の言葉を、文中からそのまま抜き出せ。(句読点等も字数に含む)

問6 傍線3「対句に似た修辭法は、日本やヨーロッパの詩文にもないことはないが、中国の場合にくらべれば、それはほとんど例外にすぎない」とあるが、日本に對句がほとんどないことの理由を筆者はどのように考えているか。本文中の言葉を用いて五〇字以内で述べよ。(句読点も字数に含む)

問7 傍線4「そのちがいは遠く自然のおよび社会的環境のちがいに、少なくともある程度まで由来するのであろう」とあるが、日本が非相称性を愛し細部尊重主義の文化になった原因を筆者は自然のおよび社会的環境のどのような点に由来すると記しているか。その説明として最も適切なものを一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 日本は大陸のような広大な砂漠や草原もないが故に、そのような相称性に満ちた空間を嫌悪するようになり、また水田稲作をする結果、地域人相互のかたい共同体により個人を大切にするため暖かい細部尊重主義となった。
- ② 日本には谷間や海岸の狭い平地が多く風景は均質に広がっており、また農林業のムラのために労働には密接な協力が必要とし、意見が合わない少数意見を尊重し投票により村八分にしたため。
- ③ 日本の自然的環境は京都の東山と西山の山容の相違のように、自然に相称性はほとんどないも同然であり、また社会的環境においては、共通の地方神信仰により束縛するような全体的な拘束社会であることが多いため。
- ④ 日本のムラの多くは山脈に囲まれた平地であることが多く、そこには富士山のような相称的な山々は全くなく、また社会的にはムラ以外の畑を耕すことのない自己中心主義であり、全体への配慮が行きにくくなっていったため。
- ⑤ 日本の人々は狭い平地や三方を囲まれた盆地などに住んでいるために、自然的環境には均質に広がった相称性がなく、またムラはムラ人の密接な協力が必要とするため、個人の注意は部分の改善にのみ集まるようになったため。

問8 本文の内容と最も合致するものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 中国の文化はかなり徹底して相称性に満ちている。それは都市計画、建築の外観と内装、家具や器から、そして定型詩の対句の技法にまで及んでいるが、しかし、現在の中国ではあまり相称性の美学は盛んではない。
- ② 西洋の文化はかなり徹底して相称性に満ちている。記念碑的な建物である古代のギリシャ神殿からまた私的な個人住宅においてもそうであり、そのような相称性の美学はどこにも見られると言っている。
- ③ 中国はかなり徹底して相称性の文化を持っている。例えば記念碑的建築である紫禁城やまた個人の住宅である四合院においてもそうであり、また銅器や陶磁器においてもそのような相称性の美学に満ちている。
- ④ 中国文化における相称性の美学はかなり徹底していると言っている。その理由の第一は環境を理解する道具としての陰陽説にある。左右相称に原因を求めることができるが、第二には対句にもあると言っている。
- ⑤ 西洋の文化は建築や絵画にかなり徹底して相称性の美学がある。これ以外にも詩(ポエム)においてもそうであり、定型詩(ソネット)のほとんどは対句の技法を凝らして相称性の美学を成り立たせている。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私は当時「正直」の二字を理想として、俯仰天地に愧ぢざる生活をしたといふ考へを有つてゐた。この「正直」なる思想は露文学から養はれた点もあるが、もつと大関係のあるのは、私が受けた儒教の感化である。

(長谷川辰之助「二葉亭四迷」予が半生の懺悔)

長谷川辰之助は一般に二葉亭四迷という文士の筆名によつて知られているが、本人は文士と見做されることを一生にわたつて嫌つていた。この不幸な文士は明治新文芸の変革者であつた。しかし彼は文芸運動の新旗手になることなんかのぞまず、意にも介さなかつた。彼はただ、「正直」の理想に生きることを希求し、そのために彷徨し、幾多の挫折を味わい、ほとんど人生を空費する徒労感を抱きつつ、明治末年にロシアで病を得て帰国途上、インド洋ベンガル湾沖にてカクシした。

その洋上落日の激しい光景は、みずからを理想の火によつてほろぼし尽した人の悲哀をささうのである。思想を抽象的に語るのがきわめて拙であつた長谷川辰之助は、「正直」の理想についても要を得た言葉を語り得ていないが、

X とか行爲と思念の間に寸秒も嘘のない在り方という平凡な説明でそうまちははないであろう。

しかし、これを「しようじき」と読むか「せいちよく」と読むか、「正直」の倫理的理想をもつともつよく訴えたのが、彼の少年期に読んだ吉田松陰であつたことは疑いようがない。その『留魂録』は暗誦するまで愛読したという。

今日死を決するの安心は四時の順環に於て得る所あり。蓋し彼の禾稼(稲のこと)を見るに、春種し、夏苗し、秋蒔り、冬蔵す。秋冬に至れば人皆其の歳功の成るを悦び、酒を造り醴(甘酒のこと)を為り、村野歓声あり。未だ曾て西成(秋に物が成熟すること)に臨んで歳功の終るを哀しむものを聞かず。

松陰はつづけていう。死というのは、秋に物の熟れて落ちる時である。十歳で死ぬ者にもおのずから、春夏秋冬の四時がある。二十の寿命には二十の四時、三十には三十の四時、五十、百にはおのずから五十、百の四時がある。いずれが長く、いずれが短いということはない。

稲作に由来するわが国の人生観が、三十歳で獄死する松陰の安心になったことを、今日、かぞえ歳の考え方の由来も知らずに満年齢の合理性に安心している多くの日本人は反省しなければならぬ。一月に生れた者も、十二月に生れた者も、その年の新米を食することによって一歳とかぞえるのである。したがって一歳で死ぬ者にも四時がある。

長谷川辰之助が少年期に死を想ったのは、樺太千島交換条約の成った明治八年、日本中をおそった騒然たる危機感の渦中にあつて身を挺してロシアの侵略から国を守る決意を抱き、陸軍士官学校に入学することを考えたときであろう。

士官学校の入学試験に三度つづけて落ち、その原因が近視にあることがわかつて、東京外国語学校ロシア語科に入った。長谷川辰之助の決意は固く、陸軍士官学校は断念しても、ロシア語を武器として、貿易、外交面でロシアに当るつもりであつた。運命は、ロシア語との出会いにおいて、彼をロシア文学の耽読⁴にひきずりこんだ。

亡命ロシア人教師ニコラス・グレイの感動的な朗読も、外国語学校の貧弱な図書館に偶然のようにあつたドストエフスキイ『罪と罰』が長谷川辰之助の眼に触れなければ、運命的な出会いはおこりえなかつたであろう。彼は Y を忘れてこの長編小説をむざぼり読んだ。江戸の稗史^{ほいし}小説しか知らなかつた青年が、小説というものはこういうことができるのかと驚天動地の感動におそわれたのである。思想が、人間の肉体や心の動きによって描かれている。思想は説かれるものとはかり思っていたが、描くことができる、はじめて知った。しかもその思想は、四書五経、バイブル、仏典などに説かれているのと同じ質のものではないか。

極東の島国の少年書生におこつたこの感動の瞬間は、十九世紀後半における世界精神史上の一事件であつたといつていいかもしれない。

この瞬間は、数年後の『浮雲』の出現という文学史的事実よりはるかに日本の近代にとって切実なのである。

しかしこの感動の瞬間を⁵バイカイしたのがロシア語なら、それを日本生活の上に再創造するのにさまたげになったのは、日本語だった。ドストエフスキイの思想を、式亭三馬の『浮世風呂』の日本語によって再創造するのは、考えただけでも、滑稽を通り越して悲惨な事態である。それが明治日本の文化的現実だった。

『浮雲』は、眼高手低といったなまやさしい矛盾など通り越して、「クタバツテシメエ」という⁶自棄つばちの罵声を作者が自身に浴びせなければならなかった。

小説家は今少し打かかりたる所あるべし。一枝の筆を執りて国民の氣質風俗志向を写し、国家の大勢を描き、または人間の生況を形容して学者も道德家も眼のとどかぬ所に於て真理を探り出し、以て自ら安心を求めかねて(ある)衆人の世渡の助けともならば⁷豈可ならずや。されば小説は瑣事にあらず。之をいやしといふは非なり。之をなすにたらずといふは生⁸浮びなり。ア、吾⁹過てり、吾過てり。

長谷川辰之助は、こういう自責とカイコンの念を抱いて、最初の小説『浮雲』を⁷抛棄した。世間で承認されている小説などは、男子一生の仕事とするに足らない。彼が胸中に描いていた理想の小説と、彼が描いている拙劣幼稚な『浮雲』のごとき小説とのめまいがするほどの落差にうちのめされた。かくて、小説を書くことは、「正直」の理想に反するのである。

それに、長谷川辰之助は、表現というものが宿命とする虚の世界と実人生との落差に耐えることができなかった。いかに悪戦苦闘して人間生活の実況を描こうとも、描かれたものは生きることの抜き差しならぬ真実に及ばないのである。

近代の芸術意識は、虚構の自立性に安んじて、長谷川辰之助の古くさい、野暮な正直を⁸唾うであらう。あるいは、虚構にたいする無理解をいうであらう。しかし、どんなに嘖おうと、無理解をあげつらおうと、彼の動かすことのできぬ正直の理想に或るやましさをおぼえるのである。

(桶谷秀昭『日本人の遺訓』より)

問1 傍線1、3、4、7、8の漢字の読み方を、それぞれひらがなで記せ。

問2 傍線2、5、6のカタカナを、それぞれ漢字に直せ。

問3 傍線A「本人は文士と見做されることを一生にわたって嫌っていた」とあるが、それはなぜだと考えられるか。次の中から最も適切な説明を一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 文学への転向は、実は受験の失敗というけつして積極的とは言えないような理由によるものであり、ロシアの侵略から国を守ることを自らの使命と考えていた長谷川辰之助にとって、陸軍士官学校への入学こそ本来の志望だったから。
- ② 人間の肉体や精神の動きによって思想を描くという方法を『罪と罰』によって知ったとはいえ、実際に当時の日本の読者に向けて書く場合、近世の滑稽本のような言文一致体という形式によるほかないという矛盾に自覚的であつたから。
- ③ 長谷川辰之助が至上の理想とした「正直」の思想は、ロシア文学から学んだといつてもそれは付け焼刃のようなものでしかなく、根本的には儒教の伝統からきたものだったという逆説を彼自身よく自覚し、後ろめたく感じていたから。
- ④ 男子一生の仕事とするに足りない自らも認める小説への取り組みは、「正直」の理想に生きることを真摯に希求した長谷川辰之助にとって、人生をただ無意味に消耗させるだけの徒勞に過ぎないことを、内心では日々痛感していたから。
- ⑤ 小説のなかで描かれた人間生活は、どれほど作家が必死の思いで表現したにせよ、結局は虚構のうえでの出来事に過ぎないというほかない、そうした小説の創作に携わる自分に対して誇りを十全には見いだすことができなかつたから。

問4 空欄Xに入る最も適切な四字熟語を次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 暗中模索
- ② 東奔西走
- ③ 実践躬行
- ④ 外柔内剛
- ⑤ 羊頭狗肉

問5 空欄Yに入る、「日常生活で欠かせない事柄」を意味する二字の熟語を記せ。

問6 傍線B「かくて、小説を書くことは、「正直」の理想に反するのである」とあるが、そうした長谷川辰之助の心情を具体的に述べた部分を本文中より二〇字で探し、その最初と最後の二字ずつを記せ。(句読点も字数に含む)

問7 本文の内容に関する説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① ドストエフスキイとの出会いによって、小説が単なる暇つぶしの娯楽的読み物ではないことを知り、深甚な感銘を受けた。
- ② 勸善懲悪の思想の普及や道徳的教訓の説得といった功利的な文学観を排除することで、虚構的文学の自立が日本でも可能なることを確信した。
- ③ 明治中期の文学理論しかなかった以上、小説における虚構の自立性に十分な理解が及ばなかったとしても、それはやむを得ないことだった。
- ④ たとえ道半ばで倒れようとも、「四時」の思想に従えば人は安心して運命に身を任せることができ、そうした達観を反映させた「かぞえ歳」の慣習は日本の誇りだった。
- ⑤ 小説は人間社会を写し真理を探究することのできるすぐれた芸術形式であることを発見しながらも、一編の小説さえ完成させることのできなかつた自分の怠惰な作家生活に絶望した。

(三) 文保二年(一二二八)の後醍醐天皇の即位前後の様子を記した次の文章を読み、後の問に答えよ。

文保二年二月二十六日、御門^{*}おりるさせ給ふ。春宮^{1*}はすでに三十に満たせ給へば、待ち遠なりつるに、めでたく思さるべし。
法皇^{*}、都に出でさせ給ひて、世の中しろしめす。龜山殿はさることにて、近ごろは大覚寺のほとりに御堂たててこもりおはしましつ、いよいよ密教^{*}の深き心ばへをのみ勤め学ばせ給へば、おのづからも京に出でさせ給ふことなく、また参り通ふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、ひきかへ、事しげき世に、行ひも懈怠して、むづかしく思さる。

三月二十九日、御即位なり。行幸の当日に左大将内経・花山院右大将家定、行列を争ひて、隨身もわわしくのしれば、御輿を押さへて職事^{しきじ}奏し下しなどすめり。左大将の御父君は内実^{うちまね}の大臣と聞こえし。嘉元^{*}の頃、にはかに隠れ給ひにしかば、撰録^{*}もし敢へ給はざりしにより、今はただ人にてこそいますべければとて、かく争ふとぞ聞こえし。

十月二十七日、大嘗会^{*}、清暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路宰相有時といふ人、大内へ参るを、車より降るるほどに、いとすくよかなるゐなかつめく者、太刀を抜きて走り寄るまに、あやなく討ちてけり。さばかりたちこみたる人の中にて、いとめづらかに、あさまし。さて拍子、にはかに異人^{ことよみ}承る。大事ども果ててのち、たづね沙汰あるほどに、紙屋川の三位顯香^{あきか}といふ者の、この拍子をいどみて、われこそ勤むべけれど思ひければ、かか³る事をせさせけり。道に好けるほどはやさしけれども、いと A。さて、かの三位は流されぬ。かくて今年は喜れぬ。

まことや、こたみの春宮には、後二条院の一の皇子定まり給ひぬれば、御門、坊にておはしましし時のままに、冷泉万里小路殿寝殿に移り住ませ給へるに、二月のころ、軒の桜さかりにをかしき夕ばえを御覽して、内に奉らせ給ふ⁴。かの花につけて、なれにける花は心や移すらん同じ軒端の春にあへども

お返しは南殿の桜にさしかへ給ふ。

花はげに思ひ出づらん

X

をへてあかぬ色香にぞめし心を

おりるの御門は、御兄の本院とひとつ持明院殿に住ませ給ふ。もとより御子のよしておはしませば、まづ一つ院の内に

て、いざさかも隔てなく聞こえさせ給ふ。いと思ふやうなる御有様なり。さへ⁵き御中といへども、昔も今も御腹など変はりぬるはいかにぞや、
 B こともうちまじり、くせあるならひにこそあるを、この院の御あはひ、まめやかに思ほしかはしたる、いとありがたうめでたし。

C 思さるべし。御歌合のついでなりしにや、
 本院は、広義門院の御腹の一の御子をこのたび坊にやと思されしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかるべき世にこそと、

X の時にあへど我が住む山は花もひらけず

〔増鏡〕秋のみ山〔より〕

(注)

御門……花園天皇。

法皇……後宇多法皇。

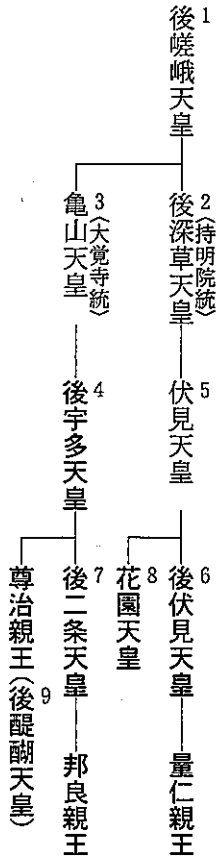
嘉元の頃……正確には嘉元二年(一二〇四)の出来事。

大嘗会、清暑堂の御神楽……即位後初の新嘗祭である大嘗祭のあと、大内裏の豊樂院にある清暑堂で神楽が行われる。

後二条院の一の皇子……邦良親王。

広義門院の御腹の一の御子……後伏見上皇の女御広義門院が生んだ量仁親王。

(参考系図)



*傍記した数字は即位の順を示す。
 *本文中に現れる人物はゴシック体で示した。

問1 傍線1「春宮」と同じ人物をさす語を含む一文を本文中から探し出し、その最初の五字を記せ(句読点も字数を含む)。

問2 傍線2「今はただ人にてこそいますべければとて」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① いまは内経が、摂政でもなくただの公卿でおられなければならないとのこと
- ② いまは内経は、ともかくも公卿としてお仕えるようにとの勅命なので
- ③ いまから考えると、内実は摂政になるような逸材ではなく凡人だったのだからとのこと
- ④ 今後、内経は公卿の立場を離れておいでになる必要があるとのこと
- ⑤ 今後、亡くなった内実はただの公卿に格下げして扱われるのがよろしかろうとのこと

問3 傍線3「かかる事」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 刺客からわが身を守ろうとして有時がはからずも人を殺してしまうようにし向けたこと。
- ② 樂の道を好むあまり、有時への嫉妬にかられ、大嘗会を妨害しようとしたこと。
- ③ 清暑堂の神樂で拍子の役を務めた有時をねたみ、刺客に命じて群集の面前で殺させたこと。
- ④ 清暑堂の神樂で拍子の役を務めるはずだった有時を、刺客を使って大内裏に参る途中で殺害させたこと。
- ⑤ 自分こそが拍子の役にふさわしいと、使者を介して有時との交代を願ひ出て許されたこと。

問4 空欄A～Cに入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① A そばそばし B むくつけき C めやすく
- ② A むつまし B めやすき C そばそばしく
- ③ A めやすし B さうぎうしき C むつましく
- ④ A さうぎうし B むつましき C むくつけく
- ⑤ A むくつけし B そばそばしき C さうぎうしく

問5 傍線4「給ふ」の敬意の対象として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 後醍醐天皇
- ② 冷泉万里小路殿
- ③ 後二条院
- ④ 邦良親王
- ⑤ 後宇多法皇

問6 傍線5「さべき御中」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 隔てなく接するべきだという御心中
- ② 親しくあるはずの御仲
- ③ お互いに配慮なさらなければならない時期
- ④ 皇族の親子は離れて生活するべきとする宮中のしきたり
- ⑤ 疎遠になるのがあたりまえの御間柄

問7 空欄Xに共通して入る最も適切な語を本文中から探し、抜き出せ。

問8 本文の内容に関する説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

① わが子後醍醐天皇の即位に伴い、再び政治を執ることとなった後宇多法皇は、政務の忙しさから仏道修行も怠りがちとなり、新しい日常をむしろわずらわしく感じている。

② 後醍醐天皇の即位に伴い、皇位継承に関して意見が異なる人々の間に反対運動がおこり、殺人事件にまで発展することがあった。

③ 春宮となった邦良親王は、後醍醐天皇から春宮御所の花を詠んだ祝福の和歌を贈られ、見事に祝言の歌を詠み返した。

④ 位を譲った花園天皇は兄の後伏見天皇と同居し、表面上は穏やかに仲良くしているが、内心では極度に気遣いをしながら緊張した生活を送っている。

⑤ 量仁親王を春宮候補として推す人々の間では、次の機会を虎視眈々と狙う雰囲気漂っている。

問9 十四世紀に成立した作品ではないものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

① 『太平記』

② 『徒然草』

③ 『風雅和歌集』

④ 『愚管抄』

⑤ 『神皇正統記』